日本一統志

九十三之四

四十五

862
160

類
號
册 ㊄

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志卷第九十三

同源

安四寺関ヶ原ヶ大坂ヶ近辺ヶ事

附長束佐之松田金七殿ヶ之事

并山西掛津守福島佐一掛河戦厳浦事

福原達夫氏寄贈本

福原達三郎氏記念図書

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3-1

日本一統志巻第九十三

安国寺関ヶ原ヶ大坂ヶ迫退去

治長来伺ふ松田金七郎ヶ之度

并小西摂津ヶ福島伺ヶ御ヶ防戦厳敷事

彼ヶ関ヶ原の合戦年の不刻を内西国方大谷吉

蒲生伺中始た迫戸田武蔵ヶ始ヶ寄竟の軍

勢多対れ上方勢の伺を破ヶ事七ヶ所なれとも

軍の色合関東方の勝ヶ申し熟定上方勢の中ヶ入れて

も一番の大軍毛利勢安芸の南宮山の麓岡ヶ鼻と

云ふ所ヶ毛利宰相秀元吉川侍従秀家長宗我部

上杉も盛親安岡寺表迄長光拙者表の軍勢兵粮
運送の同長束大蔵大輔浦戸屋敷後堀合あり三千人
南宮山の尾崎より糠塚十八町の間を関ヶ原の合
戰場の諸々組合〳〵戰ふ家中家康公旗本〳〵一
方なきあり可申入とのことあり〳〵石田治部方より長束へ
申渡〳〵毛利秀元も安岡寺も此る筋知〳〵相知
居〳〵居る筋も関東方此方へ配る諸々の備人数定
方四方より〳〵孫い石川貴〳〵る時い諸軍石田〳〵諸軍
後の如き夜前毛利家の士大将吉川左兵衛永法寺
執持まで関東方の一味相違なく合い軍家中か毛

利家より裏切り可仕とのの事なたのく大軍なれ可
押出ものなしの諸合議〳〵の離方何様の斗賢を
〳〵石治部を去り諸本陣一歩合〳〵惜る大敗しの危キ
後と思石治部先達て池田三左衛門輝政浅野左京亮
幸長右衛門尉背を〳〵可押之備一方武田勝なれいな
分一の軍東方なし思召被遊なんこれなし此の軍と
〳〵本多中書忠勝を諸備所人の搦を被
所事諸〳〵中い石徳事を形り然を池田浅野の家
〳〵毛利家裏切の後明白みい然石治部へ〳〵
る迄なれい味方〳〵〳〵〳〵迄も石知備敵の動静を

退き仍て相分れ候て敵味方分ケ不知候
ゆえ敵味方分ケ不知候田淵殿の者も見届
ず知らず
然者長束大蔵が浦い山よりの軍事なる毛利家
の使を立置早き一戦致候て退場と相見へ中い軍
東方の諸よりの大将味方と云て退宮中併関東方
の内まい沈田淵殿の者より斗此方へ出と云へ中い
云味方四分一の人数と見届候て勝利守り
居られいぬ間と存ず早く掛て退宮へ出み申
なん徳川敵の旗本一手ゝ合て一時ゝ猶負申
ゆえ中きゝ以れ共元来関東へ中合る毛利家
なれい使なれいと斗通ぜず猶ち長束
煙幕思ず第一関東勢の中へ石谷の謀も有る
奇兵の相場を致候と思ゝ長束我為使を立ず
中きゝ居い毛利家へ助勢を立ず中きい不相義
の測底惜み方便有ると存へ再三の催促も無
意なり出ず先を以成い正家為陣を張ず先
一番合戦を始ると有る如長束我為の使を出し
義を以保者ゝ仮い毛利の旗沢山と三成旗宮の上
今更驚百姓ゝ云い発角四方陣引率ず毛利

を先陣と可致との様合を安岡寺山へ流石法平
なれ共一分の発明所上軍法度への序へ出て其の功
学募りしに成早く長束佐へ書を遣り毎日
軍延引より毛利家へ書度と来る使者を呼ぶ書度
可立と有るに成て軍使をもって申
遣来りいく雑談の習所ヤ内々見合て成とも返
答を以て安岡寺山へ百二人くらい毛利別人
頭ヶ日暮み可申歩の場合なら何事にと察賀い
発向なれとも遣に有る顔色変ヤア長束
四方隙の毛利潮来方へ向ふい出陣み軍の仕方と

ていなのそくと深夜ッ是より陣中石審を立合正
家方より物見を掛出し安岡寺山へ向ふ騎馬歩
行武者の使者度を出しに成て法螺み不入事いとも
輝元方扱みに成へいよいよ不肖ちと早く法出馬
よの扱なり長曽我部い家老ふと毛利二人と有なし
いかよの者い大乱なり成くしに入て見給て所候山
使者猶の遠を焼ちとく南宮山の尾続より十八度の
使の人数く動出ち騎馬の仕来歩行武者の上り
下り間章出る様様を見ると百沈田輝政下知を伝
（黄表の上方勢旗の下ハい号令と見へしう大軍

の方より先を駆け小勢の味方吾家脇り〳〵進め
この者と相はあれ〳〵石見なる日本国の六分一腹と
称しなる毛利家と去果〳〵暮ケ原みや暮や
国〳〵と果離を上ぶい伊木清兵衛荒尾但馬同勢
一陣みをめい二ノ手ぶい池田河内守同勢三番い日置
豊前守北村越中梶浦右馬輝政の旗本前備を
八田豊後守倉田帯刀清秀脇坂右馬一勢〳〵押続き毋
衣の勇士い伊丹摂中村右京亮蜂屋軍使の一ト
云井助八郎物頭ぶい和田飛騨守先紅ケ同名の清
兵衛ともに池田河内守家来高木新助伊木清兵衛

家来渡辺弥兵衛小笠原勢右馬頭を敵に奥先へを
〳〵武勇を振り〳〵突〳〵入敵〳〵ぶ戦ふ浅野家の先手
浅野左馬助同出迎上田豆水乗田右馬頭寺西羽柴を
始め〳〵ぶ物〳〵を捨ケ池田勢い宿ケ浅野家
ぶ左ケ突〳〵入西岡方ぶい毛利い中のぶ中ケ左右の
兵い長曽我部長宗右蔵亜家なぶい石れ敗戦ケ色
を見〳〵毛利家ケい男を吹ケ〳〵武者ケ〳〵石静
み先兵粮をそ〳〵を見〳〵安岡寺肝を洗〳〵石云事を
毛利勢い裏切〳〵腹をおまみ湖〳〵四万の中岡勢云
う後ケ功ケ人み息も暮ケ〳〵絶ケ〳〵ケ〳〵れ家物

の物と早速物の事なれども大坂へ行んとする小性共
二三人れなりといへども長袖なれば迯隠る成共有物猶
万石の法師も大名三千四百の法師なれども一ト軍と云ば
成共こゝと衣の袖へ出さるつゝ引留られ初て安国寺
頭を振り合戦を業とせぬ法師共猶以失敗也
り弓矢抱の毛利家四万の大人数なれども少表軍始て
も何体こゝ皆悉く一剣一腰も減ぬみ兵粮さへ見り
二人ばかり有まいと思へ安国寺百人来てもけぬ軍
供大坂へ行馬共を始こゝ大分の軍勢を伏見
那山水口長山東名へ掛大分の味方三千四国西国皆

味方後日の運を待こゝ命こゝと宗和出て西へ
長束大蔵大輔より備ケ爰軍の内安国寺へ使を立て
ト誘引るい唯今関東方と軍始り吉兵衛と某居
待こゝ相働い味方皆活き内ゆ責へ信三千四百の法師を
以搦捕を可申へ毛利見物を設いても宗和斗こゝ合
戦仕候可申との使なり安国寺宗和の内より返答に
業居こゝ使に見の通り某宗和こゝ長い事出陣ゆ
何こゝ迯れ居こゝ毛利家の体二人と見こゝ僻
国元仍こゝ大坂へ兵粮こゝ輝元を生捕こゝ右衛
の恩を報こゝ某西海三千の勝い是下和歌へと云

捨て宗物を押えて異出を聞るものい認三人ものの
者ものい見い殿法先ま御るも迫くも時を知るこ
大物なれ毛利二人なのい者ものも三人ものも勝り
難しまいもきい（と宗物を異かせい長束の家束松
田合七侍ゑ（と押留ル異かしゑ藤方方い大塩三
郎藤い豆人安岡寺坊豆有覚の士世み名を知れ
さる勇士ゑいとゑくいとて所ゑの戦場を逃ちり（再
武家を難拵病者或い高度生死を単ム武士ゑい
禁物成（ゑ（ゑ軍見物なれ（常い紛れをれる
いゑ某ゑ拵先祖い武功の家なれ云迫事い世の中

を窺ゑ（志ち（武家と在物と云ゑい出獅子
なれ吹出（大小名中の法会業を新ゑ（町人百姓
医者山伏の類ゑ安岡寺（と集り（を抱ゑ（
右平の者い玄蕃の為沢宿の移り要徒掃除者ゑ
の治方料理人吐相ゑゆい事不只ゑ（（ゑ今四家ゑ
原の退口ま軍家中安岡寺ゑ家伸拵異ゑる斗
なり物部方石の大名ゑ四百人の中ゑ人も討死せ
ゑ者人も多員なく（武異馬異を賣拵（何方へ
薬ゑ（ゑ世治ゑ（安岡寺流人と云い者人もなかり
しい吉迫い至物の品（と後世可笑一族物と成

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

りみる

扨て関東方浅田浅野あるいは南部宮内少輔毛利の
のは先陣る長束右馬我為も八人の
賞者を引人と称し〜戦〜う右馬我為も八人の
赤備の四騎人を率て働き一頭抜出と長〜る滝
代の勇士四百人を合て馬印を先進
と防戦ふ此時浅田三左衛長束の方より浅野
上は多〜忽て思〜み武の隙の備れ間を浅
野勢入乱れ〜称し〜戦死する浅野家の侍僕
の溺み四百人と言りける有様也と上田主水相続て

進〜引分て息絶る内に会津藤堂高虎・毛
利の後の毛利勢賞者石和内味方討死員大
分出来て後途の方事と長束の備を眺んと立
る中すも乗田右隅る敵多〜色見合見
給と云いそうや十三方と十三方の敵〜の敵味方の
事なり味方い七方敵い十三方敵よい事なり
東方よい懐柄て何もなし〜武功の働し際い此而て
晴しの討死をるい者て入れと下知し出先を
出長束の兵後て六人突倒〜まよう打き立て
出〜し有者を見力を以て浅野雄勢を上て

突立しかい一丁斗も嶺より山の尾に突上りしスハ
長束勢敵と見て取る方藏が浦四郎が家来天
下の武源松田合七秀宣と云ふ人の組糸威しの
腹の脊中に合もくたん五丁一の武けたと七寸を
書し別の者只壱人跡より追掛て出しい時分岡寺
方へ豆人長束用事申すとて出しる有此陣中
に不居合しい拙も武長内のされと只壱人乃
跡をたん演地方を突立て八人突外出る人まで敵
し来所に突通しる臨勇い敵も同じ勢に
働きなり

然るに此松田合七ヶ五十一の武けたと書しる七六寸
の由緒い此士生国和州奈良の生し先祖い磨くされ
武親の代より世に落る事に合せ牛の仕合木辻
の里乃家を勤め年月を送りしかに母に成て
只壱人の若殿様に石濃松の木辻に役を勤め
宣い代ヶ以くの事武藏吉一郎と生れ第用
ヶ武藏に立入仰しの師匠し強い可教武術祖の
帯ちる事一年木辻の方へ采女と云一女乃
家と流者壱とそよめきの役しに喧嘩出来采女の大
事の家を切通ふ中に上ケて引出を何編

下の習ひとして喧嘩斗い歩捨場を撥分ひて走すも扨
と云ふ役人立合所の作法なれば下の者も兎角通し
ちい遣者云ふ後日の怨恨を思ふなこと果女
ひ云ひ合ひ合鹽出るし此常なれば恥辱を無へとい一分
有立と思へ云女の成なれば不及是非なれ手を挽
果女の教しや廓の亢出ひ常元を返し此恥辱ひ
下の所作法ひ礼ひい嫌ひ手しひなれいまゆと成ひ走へ
永く源ませふ為や教まひ〳〵と呼ひ教しまれいの
し果女の元ひの艶女二百六十日の内当日の源なき
合鹽なしはも此女を當の毒と示しと私出ふん

送れ云遣者三十人斗大紙を元連ひ尾端物
勝立方藩ふい助れと彼方を逆ひ走ひ猶ひ
志ひ方ひ玉ひ為ひ拒傳い中ひ雖ひ出ひき物
もなく此是非木戸を切る俗呼果女悲シと泣叫と
ヤレ是程の人の中ひ此孤女を扱ふひ哀れぬ果女
ひ立ひ教ひ〳〵と云而へ東海の合七日を掛ひ
所是方美立の事ひ為ひ此なき法風情と云へも
方美法見知ひの合七なれいもひ教へとい愚の云
ひ云ひ而ひし何の大戸金を元返ひ哀ひ教む〳〵
三年色ひと年ひ明く果女を書ひ特ぬひといひれ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

食七眠り覺め偽を方まを見と云へば恐怪雲文の祈い
有まいと云程恐メテ食七サア女共家を出る所の
大臣い呂今れ迄しまされまの働を見よと行ふみ
引しる様子出し二十人斗の漁者を出て様子事迄る
なし様子もゆくいれ却伏しいけ二人迄敬さい出人
却待ち二人を大臣殿の覺さるる地廊中も見
物も是へと食七の働感ぬ者いなし女帝采女
勝ての嫌しさ人間も面白飛物を帝者采女のま
よ皆見へ法ドまん三年ぶ霜月いまんまと
妹背の少ア入迄の書ちの呂しの女房サア食七を

大和一国の物語なる詞文此方ふあの者ども
口ら有迄も面白ぬ呼み事ても行ぬ采女の人中
との一禮食七ぬ見ぬの本を河内の大臣人間恐
ぬ屋へ礼云此所法大和物語の所を事ぬ
の三月漁者の迄敬さるい食七ら藻を見ぬ再
徒へ止へ木迄斗ら女ら迄いないと云ふ
と法のへぬ家質の奴ら出ぬ皆祝へ那所ぬ倒
へ十三人市出ぬ法度胴ぬ出ぬ早迄ぬ
主へ子孫の仕ら急度へを編へ那ぬ西
盃のへへ十三迄を前ら迄ら事を出ら

流れ出たのくなった金子有る抱て寝ふみ
女房ゆせふと俗な抱女を京の傾き者体何程
金弐朱出る共木辺の女郎京を人も買い何編郎
中習女物くこい男立方迴の新鮮と十三人の仲
ケ間をえ新れ嘸も仕かまぬ此所を能角金七月月
科られ中と初級日の人迄を相宿ゆ十三人ゆくゆきみ
くく暑方の一番出るの金七を見覚一落ようも
さくと飛掛り踏倒ゆ歩ゆ敷ている結句逸イて業を
晒させ腰帯よと敷くゆ歩擲る流石の男人なれて
漸記て茶屋へ入れい十三人い稼くの逸口サア此所ゆ

果女の茶屋物て誠の俗も有る事なれい様沢の泥へ
歩迄果女なりいる女の物い出ぬりくと逸口ゆき
脱イ掛り立出るを金七い出屋ゆ宜る迴女定代の
大業物三尺ゆの三原の指料れ出一只ゆ本を本
意のれ物と抜出十三人の流者共見ぬて呼り掛逃る
跡ゆ追掛出ゆ抜合な紙も茶方の金七ゆ
と様の出る事叔百本所ゆ抜きれんゆ有れ
ゆ入抜ゆ百本れ手房を助ようれ易くと病ゆ
ゆを掛抜虎口の流るいりゆ鞘清ると小尾の宝きゆ
家ゆ付て振ゆ為れい果女ゆ長ゆ危イ此場へ出る

物うと云せも石果たまま采女の移を掛町の元おまい
そ金七度をい采女の誘れと接せめ〳〵接せめかく
接を引〳〵と木辻の女弟の百人の中一のきく物采女
の誘ふと接を引けいたまま采女い金七を抱止る金
七い是止るな事も松田氏世の変化の盛裏い
不及是非雷たい遊〳〵の遊世渡り此成るく果まん
と武蔵を嗜ミ松田の二宮を出たの二宮と独寝ん
と思ふ所よ如示あ編しゆ〳〵常ふ癖さ合い放せと紅
かを采女志りと迫止メ幸〳〵と笑ミ木辻の水を呑
と接はもない金七度を振り元いて い何んの貴士有

なく〳〵まとふの侍〳〵少唐〳〵の韓信とやんい男遊み
成〳〵人の胯を潜り接ヶ四百踏別み名を脱ぬと不や
ふまとういまま耻みの〳〵接ヶ接ヶこなるの金のないサア
采女の此方力を接ぬる事ハ〳〵の〳〵敗ふ此を助く接
かい接こせ〳〵と抱なられ〳〵金七を志ろ〳〵物知ふ
采女の君若〳〵傾城の結ふ仍く雷たしかから活京
のたまを書よ女房よと楽む月日斗方を失ひ家
名を脱ぬ本忘を高る紙を今日より此死を去って
源を求りを方来年年明ら後仏易て引れと女も
女男を男たまの一とかくの出たを金七姉背の物語

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と云ふ拙里の俗語なり向後右夫婦病中
仍而成退りぬと云へども金七一生妻を以特保女の別
の一言い小腑み路ち貞俗宿と夫より武士乃
中みし花も咲し有蒲生家へ源一方来奈良ゟ
ゟ一頭の異見を調へみ後日金箱を入天下一乃
武者有と書るい木辻ゟ鈴鹿へ配てのち
潔白なり蒲生の家臣河合金左衛門と云士れ持ゟ同
見の高氏仁左方豊へい何方ゟ有りしと鈴尋
しみ松田金七兼ゟ後日法生陣と有ふい事眼前有
相知れの在哉今石ゟ上も如何形里濃の国み天下一

の武士有と云ふ七字斗ゟ拙者ゟ豊へみ安ゟ別刻
奈良ゟ豊の覚と中氏弾ゟい七字の意味を鈴考
しみ長沢の河合金左衛門ゟい金七石ゟ出ふ豊の書
付場を踏しる豊の武功なふい書沢てゟ事を
別しるみ金七笑ゟ中沢い某豊へい武功ゟ
十三人の町人浪者云み鈴鹿郡押城在
天下一の武士と中事を出して石源所しいとゟを
旅しる日上長沢の河合金左衛門を始ゟ蒲生の
家中香鷲き一言し別中出の氏仁い鈴ゟ居
しゟ頼母浦海ゟ志形ゟ早速海新系形ゟ見源之

猶人数ヶ物頭ゝ与ヘ百石ヲ賜ハリ以
仍義景の大将なり然ども敗北有て会津
百万石より宇津宮十八万石と減和の高い江
別日の為の諸代皆別把の者共斗り後の新参い悪
く際出ーいた松田金七も脈を取ッ上方へ出り
いる知み長束大蔵ハ浦方ハ留守家と成ッ居
さるといても先知ハ百石を賜ハ大蔵ハ浦も百石
の高なれども新参者の武功ハ不知ハ百石ハ
然く保護の後の書付いる細ちん士なり知ハ
武功の形ハ沼束先ッ堪忍料ッ金ハ百ハ宛

当分知行と為ハ之ハ事ハ金弘不持出る事を
尚寺代より諸大名ハ金持ハ有ハ
ハ百ハ宛渡ーまるハ
宛意の若党を把ーう今日味方ハ押立ハ
より進ッ来ハ毛田大隅ると敵を合ハ弘毛田を突
返ーいる是より長束ハ
敗北迫合ッ仮を
瀬東方の沈田勢い長曽我ハと戦ーう
束の内一頭異是と名ハ
捨ッ強ッ防戦ハ沈田勢も強ッ戦ふといても

七人の勝なる小早川勢押寄せ一戦終り一息休むと云ふ間もなく敵四一頭具足の内より玉造長次と名乗り十七八の若武者出で池田勢を助太刀せんとたかをくくと歩立にて進み来り池田勢の中より歩掛り張地の面頬の内より助太刀せんとの人申有るを弓張地の住人泥山なり武士を止め多勇をたのみ世を渡れと思ひ切の立て玉造より玉れなんと感じ居る上に続く一頭具足の中より百人斗の足軽の藝者立出で鎬東勢の乳を奪ふ妙術を尽し居る所に池田勢の中より荒尾兄弟大力を持て何の見物出る事もなき敵軍を詠めるに兵庫を分奪なと云なれば兄弟連て百人餘の真中へ切入るも歩行へ切入る長曽我部勢も十斗に成て退立て遠目に見て鴻津勢に長曽我部も長束も恐れ恐れ有り樫原の山の上より毛利家の一軍一陣に成て居る吉川藏人家元鎬東西の旗を見て居るに吉川藏人家元鎬東西の旗を見て居るに吉川藏人家元鎬東西の旗を見て居るに

是全く沈田城北の方に猶論と見へしう時分多く
紙を城を堅め敵の敵を攻め敵を押寄せ
と雲を吐き揚げ〻毛利勢元二の丸に籠る〻い党戸
福原隠〻と〻〻押寄るい勢数有様なり四方諸の
毛利家諸より一方射出し毛利の本城を一挺乃
城地を一度に攻るべ打しきい長束大蔵丞長盛
所竟を失ひ吐き崩れ〻西をさす〻敵軍も沈田
城地毛利の三郎猶兵を作り掛入交り〻追打い討
その跡なく暮ケ原の敵味方只今を猶負の場合
ふ知しの毛利裏切りの様子を見る〻南宮山の上方

敵〻〻と下り立て〻追討を至しい時分
を屋間に眺〻大軍い味方と成より桃配の本陣
の時旗を猶別形り
敵〻関ケ原の上方敵の中に形地しる人数四方の
毛利勢裏切〻れい此相俵の長曽我部長束大蔵
が補思〻に義伝中に入て〻〻討死する
多〻〻い関東勢も是に相討の軍勢に深
の毛負者多〻中に長束大蔵が補四郎を成冨鏡
〻〻〻家来に為を掛〻い此方に下り〻討死
五人四郎を退んと成る者多〻長束四郎世田是〻

左衛門尉を以て成敗引れ給ふ都て大将討死して軍
運命も知しる事なり給ふ宮討死し士卒を悲ふて
退散と雖も綱ひいろう梁瀬時み新参の内より松田
金七郎太郎の可討死所なる石のちいたる管遠と
者皆早く此表引れ伊勢路を水口の城へ引れ
て成ふ引孫を一時支へ中いろ〳〵合戦成て宿所
を業る〳〵浮世の中面もなき形事なり只今強
き武士大将と成て下知の通り勢を分け斗り此世の
思ひ出なきまゝ成ふ旅宿に集相張て
十人しいて私下知〳〵一時に惜み支へて引る水口城へ
此引れ可ちくいと歌る西蔵此世と筆〳〵神
なり金七郎る上い宮み仍せ大将の号を敗て集
み代ゝ軍門の下知ち〳〵采配を仰み讓らなり
敗軍の将再ひ下知とれ云へ連采幣を渡し
金七み仰ふ者ちくい下知を受ゝ去へいる此所の
忠義なりと云し石塚内み若士三拾一人弓張地足
洗出人長柄の中間侍者ち方此ち孫跡支へ孫家
を石可ちと端出る者上下六拾三人を以みなゝ安
樂城の左右の穴を要害ち申道を離ふ対
ち義一孫を入ゝ突き逃さんと待掛ゝ長来を先へ

退くこと能はず長束の諸隊南宮山の麓より攻討ふ
諸隊三百人を引連れて静かに九月十六日の暮遅く
居城を目指して帰る
吉継は松田金七郎を以て諸隊に退陣を命ずる
家康は三人秀頼の使者なる事を知り二万の兵の
上を発せ鉄砲の音遠近四人あり攻撃止メ八
幡の長柄なん突撃中の上刻より西の刻の終迄
石筒討死の者五人なり諸隊討れ負四百余
人強の内訳は此番配を過を仕
いと哀れ人を水口へ送り池田勢の志津へ戻り敵十

を人討れ我も劣勢討死す・・・勇士
老長者我迄七人の士卒敵に・・・一騎
異見の人の内此表へ信ち・・・百人斗残る
・・・帰国し・・・
此度軍奉行討れ上方勢岩国寺よりの
七月我迄の四回勢長束大蔵の浦の諸隊
不見分
黄金沈田家に　五三百七拾
同　浅地家に　九百三拾
同　毛利家に　五六百

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

石三郎三郎九百討取早三郎深手負て倒れ死さ
る軍何百人と云負を石田知
然者福島左衛門大夫正則いかに今日の関東方一の先手軍
を破しまう上方勢の大小名共武名の正則を能存知
の事なれい正則一騎合働なく元来小西摂津守
殿長い石田方へ使を遣し軍東方と上方勢と有合合
相はれ宮ういはれ関東方の先陣福島左衛門大夫正則を
い味方敵的と思へい此働を設見物見亜そい内府本陣
一番の事石可叶そ上陣う見る同し温使みい様い家来
を向ふ下者知り大概人数同列しう見物いはと
有しかい石田も思ひ為ひ乗遠者の正則を強
調の高声なるへ此方事み味方新静み伝を見合く
法合戦ちへと遣ちい小西摂津守殿の大小名
の正則働を揚ふも尤所の軍事の様子新
御名代と有る三成の口上み静み伝を見合よと城み
籠ての事なう角廣此山地の敵味方共方る降大
軍迫代迄双の大合戦天下分目の合戦見合小西
て始明り頭備て屈ると云い三成の事と口達此山
治長い右衛の恩海山まと堺の町人小西清三郎へ遣如
法の御法九帝と云事を武士み請れ立さへ歌有み

六万石の孫を以て肥後国宮地の城を従四位の侍
従に昇進せる伊恩頼報が秀頼補佐の志を助
け為の加勢なる運のごとく豊臣の
軍幕東方に成るも同利能者なく只今を
為人なるに一戦に同党させ唐日本に
を張さん能働ケ西と六万八百人を引ける能く静と
内合ふ事のみ知る勇志の中武勇に手角孫も多方
〳〵人数も大概同〳〵なり只今の軍の相違を
能き見知と敵味方の諸侯も前〳〵の軍より山西
の勝を福島と大名も士卒も皆一同を福島の軍

の指揮諸手の勝ケ到為有形軍
一芝居の三度息使双方一引分ぬ福島より負
二百人討死八百人山西の方より討死百余人
負死百人指揮る術長方より軍使を以正則方へ
〳〵なるに東西と相分る事の同利みに極相〳〵
不可ち遂ぬ〳〵志の志を存〳〵軍中みも弦
為事山のごとく今日の味方諸通し勇〳〵為働き感
早然るに兵粮者せに内双方より覚の者を出し
化粧軍ケ方内兵馬を休まる〳〵又浜合見て
入るの口上なり正則ケ能く使者を方〳〵東西と

相分し日本諸大名の同列に成しる事保科田方に
自力を以木筆屋上り相有り筆用み毒ての一味
十三万餘なれい猶軍の陶筆用羅東七万の小船へ
一味の正則様の不筆用の正明白し孔安愚〳〵一海
合戦を某相馬猶員まといいへとも連義也度様の
軍立ありて正則様の備表へ橋ず事百四十見文兵
船きふ内化船軍一海合の戦まとい強なる所乃
仮ありて日本の大小名東西へ出て押分て天下分て
同と定しる合戦みた孤の馬廉〳〵数る去程の陶月
浦に見今まとへ宗へいる吾船ず首の百船用ムて紙

とへのの迎そこ小西摂津守屋敷ず焼き正則の
廣云ふ某の木筆屋上りい知しる事ずし可怨ふ
ゆえ合事を中合る吾馬を乗ふ大将の嫌隠り
人み百餘食馬み百匹銅〳〵死を求るい西美乃
勇みしり仁道所なし当ふの水鉢〳〵と云より早
先を出へ海陸を沈みと鞭を呑り馬を引立胴
縄百発鉄〳〵かりる戦場なり
沈り鉄合戦己の上列より始り千の下列を猶
員の長合ふ見へ長上方諸の宗徒の勇士数千人
討死〳〵ず百の内討死器しい大谷平塚戸田武蔵守

為た迫蒲生侯中討死されい此の士卒十の内
六つ〻討死四つ〻蒲生侯はしら後義まき羅東方より進
み多勢の上方諸侯の為合能登も後しとる振出ふ
見へ知み毛宮山の毛利四万の大軍裏なり味方
〻長束長曽我部を追討み池田淺野の両勢と
交り〻追崩〻られい又毛利の四万の侯十三辰
ゆ出寺も首取り多辰ゆ侯十八辰の侯ゆ辰い崩し
〻逃散り十三辰い関東へ寄属しつい士三侯上方勢
の方より減〻りるゆ石田治部ゆ浦三成も家早叶旨
後と思ふ顔よなりしつまも小西の三侯と治部勢

三侯中書一侯宮部善家の本陣二備同士大将
明石掃部ゆ一侯石田三成の旗本三侯島津兵庫一侯
大谷山城ゆ同大蔵ゆ二侯福島宮内京亮一侯小川乃
助合組ゆ侯合〻侯の員減少しても士二侯ゆ千七
ゆ六万ゆ多勝い完竟の兵なり一備ゆ二侯ゆ逃〻
御羅東方ゆ二備と三侯も逃崩さい又手負ゆなり
見〻と小西摂津ゆ侯長い福島家と二度の合戦
ゆ仏掛〻て剛の者ゆ此度い関東方の本陣ゆ
る桃配の陣張本より戦場へ指出て有るゆ毛利
勢裏切の様子清正より渡してい七八所山

と岡との間なる大道を出ぬ十八丁もてらとろへ
ゝ
津本陣あり南宮山の尾崎より毛利勢横一下り
い裏切の如き有り見るゝ乗しと有る早馬の注小
人三人注進する所の様子の中に猶別に
沈田三尼寺輝政より早打の諸馬二騎来り毛利
勢只今関ヶ原裏切長束治部大輔を追討ひ申さ
れ一味背逆との事之必定注進の小人あ人の内一人
ゝ今と有り返し此る注進申ふ大形
御前ゝゝ稱ゝと注百より貫鍋を手の下別紙

百ゝ是を三度ゝ寵の旗を不怪しうと津
有ゝ百ゝ百ゝ毛利勢の安否如何此所あ
人の内ゝ人の注小人い今と有真出み注以戰場
まゝ毛利家の勢ゝの長束治部大輔を追討ひ申
いを高度見届ゝ為ゝ右の注進中る津陣中
注進ゝ見の不絶ゝ沈田方より注進の諸馬中次第
小ゝ注ゝ辰早速達ゝ注再注小人い限注十文字
あ又沈田方の諸馬ゝ不構毛利の陣場を見部
ゝと見届ゝ為ゝ注小人頭ゝ注
今世ゝ毛ゝ猶御前ゝ注と云い是なり内府公出馬

物取を成い事は生癖なしい早速れ
て入は再と思ふい結句才一の忠と可成不仕事
況く二番へ成仕先様一手ず遠く立帰りよ
方を一番み使立成剣へ頭み成い事ゆ何と
不審を立しとなり
内府公は家人を大ゆみ成れ立成役教立
ゆ新参は加増の沢才は一生同は人情とな
見へ勇を下と成ゆ時の使奏弟子頭物
ハ多ゆしう毎度知仕成い事なゆ奉
行役人ない兎角仁ゆ物毎の裁判人ゆ

戻りかる様成を事仕役人と成仁者を
と成用しう大名み成れ立の面々い知様は藩
代高み程の厚き流中を況と成試は境の
上ゆ成仕ない様み内府公は同利の奉仕役
人悪を職の様を脱は後世ゆ残るまで
名を残は流中多かりるい幕代の明
様とな見へ早
然者内府公は家を三町程先へ移へ
家康公の軍配治は家も時と知しうと仕
有りを酒井伯耆守様三町い影変は人の事

せ取り宮前い立すも先へ出しとられる孫を殺す
との注事なりしかみ三町程ゆきいかに問先しなる
家康公注笑ひ成前ゆ立すあり事ゆ用ゆうと云い
己等ゆ首ゆ危イかゝ云ゝうゆ家康ゆ差引まゝ殺三河
士の首い能仕ゝ居るをい所イゝい思いゝ我侭をゆ
奴等ゆりと注意ゆ成ゆ出高桃配ゆう三町藤寺海
戦場ゝ詰る仍ゝ八十程と云ゝ
家ゆ福治と少ゆ合戦ゝ入れ今日の勝負究ゝと見へ
一場三度の戦漏一息後ゝ又四度目の戦の冷しき小西
摂州行長い先刃正則ゆ兵口の後をゆ仍ゝ怒りを

激しゝ士卒を進め戦ゝ又正則ゆ方るい今日於
諸ゆる厨ゝ武勇の敵を討れしゆ為先参かさい
日福と虚嘘しゝ先ゆを返ゝ戦い双方のゆ員
討死ゆ負親のゆ員を見ゝるとて色を変ふ事然
成程の世話変場なり然ゆ小西ゆ陣中ゆ勝の
高サ六人張り家の男ゆ人立ゆ出ゆゝみめ海ゆ成ゆみの
洗ゝゝゝ家破潰のめき勢しゝ時今迄ゝ出る兵
い彩鮮治帝東第三帝無川四帝本皆ゆ帝と云ゆ人
の唐人ゆ人い通知官答山浦の北ゝと云ゝ迄年日
本一渡ゝ出兵ゝの密人ゝ馬例ゆ成在ゝ時今迄

三度の合戦ハ石田治部少輔と四度の由諸と見諸の
軍束の兵船と船ハ出し合ハ合ハ船員と
呼ッ〳〵小西旅宿より帝配を揚ゲ下知し居る
き人船員を不及申押並ベ切の突入と勢を
揃ヘ下知出ハ通詞官四人の唐人共ハ渡せ
しうと突き入中ハ唐人共ハ日本流を見習ハ習
しまハ船戦陣の時ハ日本人を悉
く突殺し〳〵しかい共人余ハ討る中ハ本首
ハ帝と云い諸守城木首判官中華へ送ッ時
の高勝の子共ハ長崎ハ送ル此度日本人へ

渡り居る四人ハ慶長四年ハ中小西ハ朝鮮ハ不服ハ同
年出ハ着ハ来ハ九帝ハ子と云ハ小西諸代船戦ハ
於ハ書ハ在時不帝ハ使ハ日本人の案内ハ
此四人勇壮ハ事日本の猛人力量と云ハ上ハ
思ハ程の強勇ハ丁寧ハ記ハ留亜知去年慶
長四年ハ一人世間の猛ハ物為ハ何ハ為ハ
本国人不ハ船戦ハ帝ハ猛ハ兄弟ハ寝食
ハ一ツハ人ハ常ハ変ハ同ハ名ハ名字ハ分ハ薄
石連ハ先ハ一ツ事ハ猛ハ馬ハ乗ハ相亜ハ
何ハ見小西ハ先ハ猛先ハ押立ハ一ハ

四人の唐男を出しいる所常無き大分の費と見て
唐人宿所より日本人百人前の働と見て中あり木
首多弟の唐男に四人の長しる大分量福者皆別
々に押礼ちい冷しかりける有様なり既に正列の
先より所斗も所突立々兵馬足を留兼しう此者
一人先可見文箱を正列に出し旅本の馬脚多く働
員の詰り是を見定まり後合ちし乗合ち
を所長なり可見文箱居しる正人若衆来り唯
所一の先所押立いと告ると有既なて己い先人
吟々に死居し文箱の迫の若い助死み死所と立人
不死み居と我今近付々歩前の々歩敷して住人
々と若衆近き寄り見人正則に向々脇の後合ち己
清れの搦を押立離い俗より味方働者の前立ち
殿も生々い世間の立まい小西み員や笑物み如んう
死ッシヤイ〳〵と云捨々立所常中味方所押立正人
駆付々眼を拭き出し虚嘘を向を見れい四人
の唐人人頼を突々進ミ来る文藏高度見々脇
(頼カホノ)
数唐人共あり〳〵日本人の長共み助として所居
と思ひしみ唐人共み所突出々共一人所長の方と
追々や己文箱の笹の市を吟せんと言俗み東第

三郎と渡り合ひ三手合せて引揚げ端迄追ひ詰め
入道の力を落かしいるゝ義早業の有り鬼の
如き東第三郎二つ目にて側を切る新蔵治郎此
見て獅子の吠るが如く息巻き突て掛る二人共の海
道を行見上げて端迄走り掛り組しるゝ四列の
旅宿より吉村又市使て先の戦ひ せよ
流石の義渡し元力者りし新蔵治郎も実に
と云押甘を見市見て義合んとを可見義渡
なる助るとと云と己を先さめて退て居よとい江息
の廣云雅云江よと見て一代一世の力足大地を踏

抜く抱る小ゝ実に云と負抜ぬ抜しうしい相撲を
覚へ義なる実り掛て首をれうう義り足
の中指を下より口を出し喰切るい新蔵治郎
冷しき唐人なり御る正市本法より四列方へ使立
りるい諸方の合戦右抜い潮東利運と見て不正方
と小西との競石義長い新方法と覚て先ゝ
成り云旅宿より成も加賀を者合力出て
清四上なり四列此り少と等清康治郎方へ
涙をもらと流し流石左高東四列を清洗し話成
清四上とない加賀の元所伝者て加賀の元へ向

使者

弱を強くを正則の弓矢の長短を計りと遠慮なく過ぎ〜鞭笠み立て四方を見廻り〜るの可
咒や義経先強く上総み国〜押立る世界漸寺所
斗も小西の物を追立〜たを正則遅み見るよりも先陣
の味方上総みを成しうスハ軍い大勝を諸一同み関東
方の猪と見るそはし見よ味方軍東路右力の助
先み首を石貴者る〜正則ゟ斗右力きう〜と注
の藤先右力の助先白い注長の方なり離いゟ合
為ぎて歩敷〜せと勢を猿〜当を乱らる兵氣ゟ
勇福島勢い引立しる古辛の路ひみ家〜勢尾張ゟみ

成しるを見て注進〜先み立て抜ケ突ケ
福島丹波ゟ　尾関石見ゟ
長尾隼人正　大橋宮内ゟ
松田下総ゟ　堀田出雲ゟ
黒田源吉殿　福島式部
伯石但馬　斉藤修理
石の猪人藤先を指て十本一度み歩〜い注先尖
み突立しゟい小西裏〜と　み助町斗い注突立て小林
兎ゟ助十郎と名乗て卯の花威の鎧品て月毛の
駒ゟ歩乗て来〜を右力と見損し〜ん熊川四郎

飛掛り馬より下へ引下し背中へ負り生捕り世良歌
味方入乱れ落合者しなく乗込助若堂六人を道石
押並へ相はれり戦ふ成行是非可仕生捕可申覚
発明い一人の持料しう熊川四郎の後より向へ来り
られ〜右の手を先延熊川の妻は指の環迄〜を抜
より早〜乳遠突き二突まる〜多掛り熊川の肥腰へ
突込るる成流石の唐人熊川四郎あはを前〜と目
くるめき紀藤右の脇を押通るを知を右刀抜持て
後より袈裟掛り切よ書い行足先つと切倒
る知を上へ乗上り熊川四郎と記〜

さる先物を奪れ正則馬後へ走り寄物を入る如
はは柄と宮日正則はまる〜一番首と記〜て祝宴の酒
の石の加増を先知百石指石小林兵助一時に武功
を脱し者記

世良源の間爰戦成旗本一番首と不来成迄の
れる者と成よし

日本一統志巻第九十三終

日本一統志巻第九十四

同源

福島正則武勇之下知失之事

附上方勢敗軍之事

并於関ヶ原大谷備ヲ破リ

内府公黒田甲斐守ヲ為援遣又毒大谷備ヲ破リ

附福島左衛門尉ヲ追同苗義家武勇を助力腹之事

并内府公勝山ヲ首実検諸将ヲ対面之事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志巻第九十四

福島四郎武勇之不知失之事

附上方諸侯軍之事

并於関ヶ原大谷備ヲ固ル事

彼ヶ関ヶ原合戦年の刻ヒ[illegible]ヒ諸侯ハ[illegible]幕東方様様
能くなれ共毛利四万騎ハ我朝長束[illegible]敗ヲ[illegible]
年間の人数積と云上方諸侯の中ハ[illegible]も徳川ハ西ハ
死ハ[illegible]ヒ場を去ヒ[illegible]福島と小西戦の様子
員石田廣(三成方より使ヒ[illegible]小西迄今日の武勇ハ
方の中迄一業見留居る[illegible]

左様を法度破れば事成とて集り合しる事も
ちらちらと越出る者は長崎奉行中あて相伝ねば
集旅宿を拵る内は法相可成法度なれども宗門の法
なれば生害い仕まつり強敵なれば歩兵の退散とて
敵見方と云捨て采配を揮て棘を勇め
やみ喚と福治郎（ちゃんぴん）突て入る度目の戰ひなり
棘糸市左衛門（馬奈良戰意也）最て何やらんと
と等しく法度為なれば正別の勢い進も疲てん
やる上は兵馬を志ちらちら法体旅本なれば人勢く
きと法度えらい正別岡上りて正則の武勇を押へ

る様成日上不及是非と岡上り福治郎奉正別
馬奈良一下知出る事相孔の手ちらち息絶き立上る
左い胸あり相き蒙しらち歩行武者等外立体業を
い疏殺出て己等常日持出る何の為て一方事の
用ひ立人と士卒を誉ふ其人空爰人間と可成云
ひと言ち下知ちらい者人も立体なのなら成三成三
み助ちる先手後陣の区別なく六名人除正御
み押御ちて様みえんち敵ちい正則奈良一関東勢
の中まちい正則尾（下りされて物も成奈良）と法
有所ち岡立ち可見文義大音上ち何の尾ち為て

敵を逆さんとて手中に尾も頭も成やと可児文蔵
真先に成て指物人福嶋家の覺の勇士跡へ續き
三十の人押き立ての槍の冷〳〵此の林を本拠の
吹立をし彼やうん正則に先をの跡へ案内一騎突懸り
百石なり采配を掛しる敵突伏て首れるいの石そ〳〵
小西の首を取えのい歩行中間の数成ども壹万石の大
名の軍に勝さそ〳〵と嘆思ひて下知せる者の下な
も可児文蔵吉村又市押並んさる動本の跡のやや〳〵
〳〵突〳〵と七つ物の曝先張〳〵小西勢突立る
ると見るよりも正則馬より飛下り槍を入よ〳〵突

敵い立すの槍先の踏込どし正則の志津ヶ嶽
の来の跡の出際を見突よと槍と出るを大筆
宇右衛門掛て大勢ども後あるも此二本の先へ踏
らい突伏せいつて見ゆる踏倒せと使者の家来云
見端出〳〵跡掛て正則を自人なるも先へ通さ
ても指物人旗幕を上て一同に突懸〳〵る小西の勢
時に懸れ立を見て石田治部の浦家の旗本嘆き
立物旗をよめき立小西摂津守長右旗も敵に
押寄を見て〳〵慶〳〵と〳〵一方勢の陣中を潜
音の影〳〵早此高い内府公御本陣二度に七丁

押出し市蔵の下の内より立てゝ高代寺の名物
ゆゝ敵を立出させんと凱奇を上らんとす
本陣より吐と上ると百姓ゝ市蔵の相図の凱奇本陣
別の七方隊の新兵隊兵衛助合十三方隊の凱奇
と天地も崩るゝ斗ゆゝ寄手の軍本いつゝ不及
伊吹松尾南宮山の本〻の相図動く斗なり毛利の勢
ゆゝ方吐と崩れ石田治部少一番に崩れ立て
市蔵〻猪員の砌を追の高槻の小西内府
家康公鞍の上ゆゝ立上り諸〻スハ軍の大勝なり旗本の
若者共歩行高名せよ見届〻と頼りゆゝ下知の

走り使ひ〻〻市蔵本の西〻思ひ〻ゆゝ駆る小西り
近二の近習武者人斗なれ引れ〻此高槻敵軍ゆ
るといへとも大将を始〻諸方れ集ていまし十万隊
人数なれ〻物を申報へ忠義高槻殿届ては一
なれと勢〻ゆゝ謀云ける仍長馬上ゆゝ息絶ゆゝ海
笠中不相ゆゝ宮ゝ三成ゝ分際ゝ此上の軍設ける
右衛門恩賞ゝ一分の武器ゝ秀頼先遣をん
ゝるゝ市蔵兵衛の中満足と僅の馬上ゝ彼是三十人ふ
足ゝ立退ゝ福島家の若者共先を単し遠ゝ
歩んと七隊隊人追掛〻ゝ踏止り〻〻小西ゝ者共七人

討死せしかい正則方も多指人共討れ強りて多員の者い原中ゑ倒るもの仏もあり落ゑ員さる者ともに指四五人小西ゑ退ケしゑ沢長合い戦も実析力を志すく出来ず程人を物常早力歩まい戦ケと若年より相撲ゑて名人成しゑい是今高を者ゑ入れて い投ケ抜て い投八人を投殺落ゑ云ケ不員し斗是迄しゑ力坂さしゑ藤沢秀郎の先逃をと離を退ケしゑ押殺しゑ方此前ゑの方へツト入しい此日より腰ゑ痛きゑ又今日相撲ゑ泥水ゑ歩事八度ゑ及しゑ其水毒ゑや頭りゑ力用ゑ抜ケて

苦痛ゑ腰ゑの中ゑと此雪源を仏をしゑ上方物を退掛る筆東方影痛を色を早敵の者影痛一見二見義ゑの中へ入りるゑ東糖屋沼村と云在人へ出しゑ入口ゑ僕の小事有しい旅しゑ此ふ糞屋ゑ立ゑ方を寄りる内ゑ頭りゑ腰痛不止歩行も難叶此ゑ途中ゑ病死せんも知れず此事析ゑ人為もなき俗庫裏ゑ有俗僧を人庵ゑ行しゑ藤人まい析痛特病発中ゑ歩行難叶一夜泊留ゑ頭しゑ下と頭しゑ下ゑ物長ゑ立しゑ俗特あ泊笑ゑ此事い為僧を人

ゆゑ不自由なれども諸御い（保）世の百姓共歎み
合はい大勝手ないさ寝不（ゆ）寝ゝ嘆ゝ暮ゝ
使へ（ゝ）い始有ゝそ凡（ゝ）
家康公も諸馬を進め給ゝ先陣い為して遠（ゝ）所
俵と旅本い俵を正義見元様み紀めやゝ大音上ケ
られ諸軍配ゆ始へい世高き西る上方勢の中（
伊丹之庫頭　　酒井助右衛門
奥平美濃守　　村越之庫
世四人一同形ゝ〻名討死ゝ早諸所の御加勢
み拾ゆゝい一度諸加増も可ゝ不運の討死之

世内み奥平美濃守仍の老母（生涯三百俵
所下ゝ年四人の次（ゝ）ゝ繼ゆ家へ（ゝ）い
小坂助六殿　　安藤弥十郎
稲葉市右衛門　　兼松又四郎
堀内志摩守　　嶋ゝ惣ゝ衛
二男加ゝ衛　　同　飛ゝ
同　右京亮　　内藤利右衛門
世稲人い限ゝ一人家為継御記ゝ年
討死ゝ三河中別諸譜代の荒者今日い油断ゝ中ゝ
諸兵有ゆ不及是世度の合戦ゆ足痒ゝ出る斗

なりと思ひしに知恵の分別いつて不足有為の業て後と云ふのい何程の紙首れても紙首と
ゐるとも皆首別帳成る者へれをよくと云て実
伏てゐま首れしと兵器し武功を立んと覺の元を
人る斗れ〻せ〻う樂の工〻強り費れし共退
首と呉し別紙の目録しう〻紙共家康公に名物有
清目付清使者を所伝付家連〻戦場を案内る
知へ業さる〻中よりも れ〻返〻討死るか〻関東勢
を討れし有り是を業東元寄れしるを退首の数へ
入きん事弓矢石此体成と御補中まる清ゑま有り

別紙員の首み清ゑ所成の事家康公に発明之儀之
信云清見義所成い事をし此君いたりをさ〻あ
武道の此体細なりと諸大名衆中武功を仰
不なる乎
堂み此君い清馬呉う嘶動百人ゐい呉〻出程成〻ら
清君年より格度の戦場へ隠せのひ清武功の大物
有白旗を人頼み招のひ〻ゐい怨を除人と成て清
倚の船出来清馬呉うの警固厳重み成る事此も
遠者なき清軍配と事厳此君い業策の東西南北
必里み八里の内悪く業東方めて〻見へ〻とゐり

加成に逃る敵も追ひ詰めて悉く討れ死し追討軍
東勢の下に一同み凱歌を上げまし実や討や勝ッな
濃ッかると喚叫び追しる加藤退討を遮さる単騎爰
事を報を知らせ宮み者よりい戦場の高い〜功名ふ
成〜事者感〜めて又の宮れ指物黄毋衣の高い
宗近〜〜手下知を使へ大将らの首い退首ふ成
板額の手勇賞称して生捕いて猶ん此者不勝手
れいへと迫る下知ならい上方勢の大将宗
ら石田を始め赤多来宮敵三百人と馬猛へ
強〜若しなく一足も落退んと伊勢の嫌伊勢海

を追ひ詰さて黄昏勢蜘のを張ッ上かを敵
軍〜いる有板い濃ま〜かるいる浅井と
浅津兵庫頭義弘同中務大輔義八の人数度の
戦み又歩兵を員〜ういこの勢を率〜足を不
孔雀を〜〜筑前中納公秋仁羅東方一味ら
〜名ま〜る高名もなくれと為る〜退敵
ら〜ま〜〜義の浅り此浅津勢の退口退結れ
一〜と万勢の稲葉西岡右宮光謙ら〜笑〜る
軍功をきと〜〜も義労成宮浦い一万人の
敵を宮初ま〜る成属〜忠義右今日羅東方ら

敵一字落カ

清利運とは所詮此の危い合戦石田成政
を力助する持つまい是岡豆の様み常と謂はしも
奇代成事ゆい大谷刑部を筑前殿（討れい高より此
怒哭怨恨秋（九）に対し弾正殿前くより軍好一成を
石橋先へ差このひ一なるよう兵部石橋てこ此為み
お人の見見をもおーもい清田なく秀秋公い出頭人の
松北豆馬を馬鹿（嘲笑の為の為康を討れて諸人の耳
目を可驚と進めおくと下知をーかい元来主馬と血
家盛つなり若年の勇士なるかねいと云もの（た旅
事を色々迫分を見て不及是非お家老稲葉彦右衛門

西岡石見守猪飼遠江三人の者を以て豆人秀秋
を押隔て近向の松北豆馬い黒門秀秋公を押止め
稲葉西岡先へと志一方の者み武の隔を辛一て
押する為康三人引立薩摩勢武の兵庫頭一の
となるの中勢義弟一よりて引退を組兵高み
追掛一知を皆十間古皆見結ると百激迫一みて
迫一吐と嘲て近へ筑前殿より為を入る
猪み見本不昭の秀秋の旗本松北豆馬の武の
勢立見もなく追崩されしの隔の為み強く切立れ
又六町の隔まで筑前殿八百人討れい薩摩勢

も三百人に対死せ將津勢の志い迫も薩摩勢
薩摩を遠ざけいけまし深手勢を思ふ後おれ悪
く歩死し命を可捨物をと覚悟ち事なれば
死も不知の覚者ゆ出合ゝ対する筑前の勢十
町四方の道塞る中ゆ見し人とゝ此時福津勢
福岡旗本一番津中書ゆ百人筑前勢を追
ゝ正別旗本追ゝ薩摩勢の中より
歩出す張帆福岡刑部ゆ鋪の栄する馬を乗つゝ
後へ振る玉ゆ馬驚き半駆出する為福岡
勢此者ゆ出ると張立倒し正別旗本ゆ刑部

ゆ鋪を居直ゝ先よと二のよの間を蓋し下知
し西岡勢追ゝ追歩の者ゆ阿ない旗本の事い皆ゝ
不知ゆ中の状合為ゆの張立い馬ゆ玉ゆ駆
出しると知る者なし福岡刑部ゆ鋪近出れと合
点し旗本張立し間遠なう千時福岡の家人堀尾
ゆ尾と云士を出潜し刑部ゆ鋪の馬の口を引ゆ上月
雪三郎い武功ある士為刑部ゆ歩撰一付変れしゆ大音上ゝ
陣中ゆ知りるい若殿近為ゆ百ゝる馬ゆ玉
中ゆ不若馬為飛出ゝゆ大殿い常表の先陣ゝ
一二の陣備い敵近ゝゝ小西を突崩しゝる事ゆ明

白の如き旗本武士いづれも相応骨柔剛に参られ成
無一疎なる事法度を無視なる臆病者なり如く捨て
以て敵の首級のよう忠義両と称を唱へし時に
一旗本は常日頃中内にて武士人味方の内より
助太刀出し以ての通なる者共十月平家時
みなての御なう者のなる武士馬上刑法の補乃
最後の立場の立の強情と称せし時福島籠城
の旗頭と呼ばせ時今向なる福津中書り又
百人腰へ静と立て西の方に進んとする様子を見て
福島勢い出来あるとの上月平家下知福津

勢横手より進を見て中書引返り
ゆくゆくも思ひ入れ此方ない打捨節遠みを波多羅
山へ退いて強く近寄敵みのまとと堀尾吉晴
福島刑法補を本陣へ引返して馬を立させて
八上月平家下知みを先へ長船の方へ様子関
東本陣内府御見て福島勢い沈も先も武勇の上
みなおなるい正利を越者百てもなるもの者も
梅雨両と此時も感者有し旗本の仕形是なる世
敵の敵なる福島家の先と可成不み刑法補者軍
十六人なれとも上月ら下知まる備を立活し為み強の

誣告ハ正刑の武勇い天下無双と若輩の者共
ゆの者共とも跡成ゑのいなと神の御威を恐り
ける世言ハの混雑の中成しの刑法御浦家来の還の
毛ゆ也ハ他見覺ハ正刑正賞を誣ひい信用乙ゆ書
出ハいとゆ也ハ刑法御浦の方より出ゆ俗ひい者共
の沼平を記ハおいい不上月を一堀尾を二と褒賞を
為る堀尾弟九郎ハ石見ハ嘉い殿の法馬拙出ハ
敵陣へ拙ハんい覚ゆ法討死ゆハハ遠方へ法馬
拙出ハいゆ敵見ゆ若殿御為ゆと評判せい方殿を
も法武功覚ハ日本の大小名物笑ゆ成不申事

命ゆ御ゆ之接殿の法馬を止ゆハハ拙ゆ
ゆ内府公法褒賞を受ゆ事某忠義為之為ゆ
某を第一と法定ゆ成ゆ事曲もゆ
と恨ゆ申ゆ刑法御浦所ハい我の馬を止ゆ事拙ゆの
忠功ゆ知ハる事なれ共我身死を労ると馬
を止ゆ事斗なり大勢も寄ゆ戦場ゆ死を厭
事不ゆ上月を一と云ハ旗本の指を招ハ
俗を御旗本を踏止ハい食ハ上月平三郎下知
為之為ゆ某も不及なゆ大将役の所ハゆ我討
死ハも旗本さハ御旗ハ正刑旗本一番ゆ持

喰メ落いん時おしも此戦度ニ方忠義ニ命
を命ても旗本の前ニ不知を上月下知を加へ敵
軍ニ入福島勇の武功ニ成ル内府公の御感
を受る事ハ[illegible]ハ上月を一と書出ニ方を
ハ二と記ス[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
家来云ハ[illegible]舌を巻十六家ハ[illegible]
ハ[illegible]の大[illegible]ハ智仁の[illegible]と[illegible]
ニ後年月を[illegible]正則の[illegible]
[illegible]と諫メ[illegible]ハ云正則ハ[illegible]
る大名ハ[illegible]武士の[illegible]と云事なし一生の内ハ[illegible]

何様の事ハ[illegible]も石田[illegible]の後ハ[illegible]と云て[illegible]
(出羽)と云幕ハ[illegible]ハ[illegible]
二ヶ国を失ひ刑部ハ浦ハ早く[illegible]
[illegible]名相[illegible]物をとハ[illegible]
毛利の[illegible]と云なく先ハ正則の実成[illegible]を大
小名[illegible]ハ[illegible]一の[illegible]
関ヶ原合戦ハ[illegible]
強[illegible]大谷山城守同大[illegible]
し長[illegible]筑前[illegible]
[illegible]

薩摩勢し八百と成り三百と成り遂に七百と成り七百不足と成り千の上に切り寄せの下列を一時ばの内より十数度一進退の内より戦ひの最中薩摩勢は追撃の事十数度なれども敵の押付を不ん兵い小勢ゆえ成まるも勇気些も不衰健戦しる形勢ゆ潮来勢諸方の大勢

北総果敢めしる

然る所ゆ大谷兄弟よりの薩摩使を立て中部ふ

高表の味方悲く敗軍の所ゆ薩摩の武勇同を驚ましる弓矢の猛威西岡の弓矢ゆえの使命を

恥辱を雪い様と欲ゆ私兄弟若年の成を持後れ

とる軍ゆと成下墨も西岡い様ゆ吉澤安中ゆ家名一時ゆ不て亡秀報の先使を可ん届いよ中ゆ

り遣いゆ対潮ゆ所潮相い九別ゆ所ゆ兵い云大場

所戦い云事も在不敷賀ゆ所樋を設ゆ松ゆ送

届ゆ中い高表所引れの先軍所云後軍所云中合所

先島を乗いとの使を作ゆ事小い所云公所使

乗ゆ方ゆ所若年の所兄弟所同名吉澤乃討死

有ゆ味方敗軍の勝勢を不可敗一死所猛ゆ辰鑑

入る所武勇宮武多石田の者云ゆ上村所吸

いゆ今日の敗軍い有ゆ変い事ゆの御を所ん厚

者い保今日未軍石垣前より此後軍ち事相和ゆ
有吳見ゆい様云石見の人河一膳の宮ゝる膳拵ゝ
吳見ゆし石付一ゟ際前ゝ浦戦ち石垣近敵ゆ上
不及是非事云ゆゝい事後い為ゝ覺悟の前ゆゝ死
を覚メゆい様ゆの死ゆの山の結道連もいゝと相待所在い
皆清見井ゝ清同志い熟成い清遠云ゆいて早ゝ敵
(清)引ゝて然いゝ清清家の者ゆ清家を清家用ゆ
いゝ此後事石云功内ゆ前前ゝ大谷兄弟年為ゝ
引張し進ゝ偽ゝ秀俊の出頭将兵馬将ゝ御の陣
羽織を為ゝ四ゟ藤人を引具ゝ弓張炬を先ゝ張

出ゝ備ゝ清津(の使族合い引れ相談ゝ見ゝ)退
ん付ゝる上い歩死い石ゝ掛歩れゆと云俗ゆ土ゝ立
上ゝ歩ゝ掛る前前ゆい今日諸ゟ(格度)向ゝ戦
上家河ゝ是非高名ゝ宗立来る諸馬歩ゆ者
頭(半)與兵上ゝ兵乱石覚又大谷二俵の兵馬い
久衆見を休兵粮をゝまゝ物頭足田覚ゝ
ゝ云斉功を所ゝ上進退の合途ゆ計更
大豊ゆ男捉ゝ(ヤシマ)ゝ久ゝ(ヤシマ)ゝ士ゝ先鋒い猶の
一族秋宮寺橋本の者家い判官四成の母方の家ゝ
ゟ出い軍ゝの指南ゆ細ゆゝ代ゝ民河ゝ

和列橋本ハ百姓農業を事とせり此久八儀ハ
所中ゟ乗宝院ハ十二軍より十四軍を事とし十四
軍の高高北山へ孫道の高い迫習小性ハ帳を呉
者ゟ他家の大名の下ハ一人も石筑有甘呉ハ
然中此橋本久八を以宝院見る事有り洲軍乃ハ
貴うゟ〳〵橋本我十年指南〳〵宝院の側へ仕ゟ
ハを召さい通し沙敷の軍配しるへき筈有迫之の
儀ハ以上を敷ミ行甘ゟも其志可加幸イ大谷刑部
ハ浦元来ハ水ゟ廣松と云山伏ゟ指磨帳
迫へ者ゟ廣吉へ者ゟを召し者も我水ゟ事

限ゟ取立今大谷刑部ハ浦と云ゟ事も此宝院ハ
なり彼ハ人を石捨ゟ〳〵ゟ者なり軍学も
又接戦の筈量有ハい迫大谷方へ十四軍の秋より仕宿
ゟの出れ寄騎ハ彼ゟ出ハ出ハいゟ宝来側を不
放剣へ軍道の指南ゟ中〳〵沙数の家人ゟ呉ハ
云の為なりと大谷吉隆秘伝を彼へ橋本久八
先祖ゟ筋目ゟ有是水〳〵家名を下記ゟ宝来出
粧〳〵ハ人ゟて筈筈量なり仍ハ此度ゟ大谷家
迫を可見届と云〳〵ハ吉隆者ゟ我ハ彼者ゟ
ハゟハ彼ハの者有へ六道ハ出れを引ハ宝れの一応

常まる〳〵百五万人惣〳〵異なり未来之ゆえ一応
の仕掛出る事更みを例なり対馬を抜る云を以て敵
城へ一具に退け秀頼の出馬を見届是迄〳〵日本国
中み味方之人も多〳〵冥加の者と申〳〵於敵賀多
勢引受討死之〳〵年〳〵将軍一無矢弾玉薬を
以て防いて十万の勢まで之年攻る云不可説弾
兄弟あれみ分て金ヶ崎の城を一応れ之て対方中
合敵の勢を分て引受〳〵之高之の外源と云城番田
覚左衛門に先年より山城守みゆ宮内と海を
大事方〳〵分ケそろ〳〵事を九年ひ討死仕る

とも出〳〵其事なりのと遣云〳〵荒本宮内左衛と此橋
本久八左衛大夢外を指引〳〵豆腐以を金〳〵前後の
備おし不孔無度敵を追掛ると海軍之さる悪信久
八の指なり小荷弦掛〳〵四五三百に討死
五員め百人逃留〳〵も百人の世話焼を以て敵賀へ
引〳〵五百八指人記〳〵残り〳〵を見を十一備と〳〵
二五組め後百八指人の方みい大将大谷兄弟ふ橋
本久八引源〳〵敵押掛〳〵歩行たんと出る云一度に
歩死〳〵逃方大将あ人を逃城前敵賀へ城出下
と法合を仕之遣同よりい只二備半と見〳〵押取

巻を討れんとせしの云物際まで成と云十一日の夕し
何程の大人数なも都て五色物を四方へ討出せ
多く偽て別なく思ふ偽み出抑如く悪く橋本
久八の智謀なり
内府公黒田家に寄給ひ後藤又兵衛大谷倚を
偽る事
附浅野幸長引退同名義弟武勇を以勝功事
其内府公勝山に首実検諸将に対面の事
然共只と筑前殿の疲るなき石顧め歌の大
谷殿を討れんとせしに大成誤りなり十一日の備

立は一番に毛利播磨殿抑毛利
三橋本を後へ付て入替へ引なり引なり射
こう出て鉄砲を射て敵を誘ひ敵を入れい
小勢なれとも大谷方も立留て退き武者の甲斐
長政い軍ケ原真中み倚を立秘蔵の後藤又兵衛
を呼て其い実世不小比を抜て高名を可励と
方い内府思召もなれい強分強軍の敵を討れい
敵中付後藤も其勢を武百人を二手み分て相四
方を見廻る不み家康公寄本陣より使立て
西国勢大概は敗走の不浅津大谷の者共の未明

り氣を居志りする者の分際大谷一人を以て黒田
家人等不平なり追掛討取者共の一人なりいつとも
り相伯つきとの事なりと申渡る後藤又兵衛馬
常家閑と等〳〵三人長政の過失なき不申辛
〳〵と歎笑ひ法本法ゆい只今迄も配り下足七方
の法堪ゆ〳〵立直り上方筋の裏切潜と糸の味方出来
しる為左様の法以上を業る以去法所用家法以上と
中よ岡せ源の法使い還み仕〳〵為る小性高る表
法以上い相違之又信松の長る伯い宜ても所至らく
と可所申と云〳〵宣みる迄云の後藤なり俗以上いう

不遠勇士るる伯配を仕しるる敵方大谷の伯の十一人
分れ〳〵と早くも見付掛〳〵め〳〵斗戦場へ出られいて
別る一人の伯立を知りしるいこ志申なり是を偽り
廣〳〵人数持の大名共の追付れ〳〵不便さよ是程る
成〳〵と申共長政馬常家閑の事い机
疑の〳〵る習るの此方松いまま合点の仕まい長政
所迄よる武百人を十一人みる長政の小勢之
一伯の二伯なる〳〵責てもの事長政の旗本を喰崩一と
所申者を後藤歎笑〳〵中さい来なると下知出る人
数い弥細よりの大名なとの一萬の勢より猶用立と思

百姓是捕西成の好一所の小い大名ゝ討大名ゝ両ゝ
可致御事大の人覚なるあるとゝ云〳〵い必んまゝいそと
一ゝ〳〵百人を引八張弦地十挺強い長柄歩物と覚
騎馬二百騎を十ゝの組み引。静〳〵と大勢一揆合百
人小勢の一ゝ組ゝ二倍完た者より揆せゝ組ゝ
八騎馬百騎宗八浜揆ていい百人過の二倍ゝ金ゝ
い百騎の新ゝの騎馬ゝゝ〳〵ゝ揆ゝ武ゝ八百人の大
谷ゝ十一ゝ後藤又兵衛ゝ百の十二ゝ揆過さゝ
敵〳〵ゝ成ゝ孔雀ゝ別ゝの倍ゝ重ゝ事成ゝ後
又兵衛古今無類の人数揆ゝ成なゝ

ゝ程み大谷山揆る同大雲ゝ成若軍ゝ揆軍ゝ
ゝ〳〵浦ゝ山ゝ揆ゝ敗ゝ〳〵ゝ揆ゝ久八
浜ゝ〳〵ゝ人ゝ八ゝ〳〵ゝ揆ゝ武ゝ揆ゝ
ゝ敵ゝ成ゝ〳〵ゝ墓ゝ成ゝ〳〵ゝ山ゝ揆ゝ大雲ゝ成
ゝ揆ゝ敵ゝ成ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
遠ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
ゝ揆ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
ゝ揆ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
ゝ揆ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
ゝ揆ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ
ゝ揆ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ揆ゝ

五人の方を中ゆ引包歩渡られる五百人を真
中ゆて敵の真中を切抜ゝ西ゝ七里ほの山中を
通抜ゝ[illegible]か敵[illegible]地へ入る時い騎千八人なり此度
黒田家人討れ首級五百八拾五人藤ゆ清ゆ五百
の小勢をゝゝゝ[illegible]の働いとゝ帝なる剛の者と名
感し入り
扨ゝ軍ケ原合戦の月十日未の下刻東西の諸員明
切なれ西四方の討死影多敵れ馬数ゆ[illegible]と云抜
不知敵味方の死骸い廣地ゆ累ゝとゝ所狭を失
ふ形勢ゝゝ二里三里四方ゝ西四方の旗先い百人
位ゆ成し[illegible]ゆ云指揮勢い討死の殘兵七百人を味一
ゝゆゝ静ゝと引ゝる軍本勢今い明の大小名
而ゝゆ旗本ゝ扣ゝ四ゝ廣果ゝ引ゝると見渡し
我本ゝんと押れ巻し先一番ゆ筑前中納言秀秋ゝ
の勢一万石ほの勢相掛りゆ掛ゝて頭ゝ指揮勢論
を入ゝ突立死物狂の筑前勢立足もなゝ敗走遠
遠ゝ逃散しゝ為ゆ松平下野守勢ゆ[illegible]を員せ[illegible]
加藤本ゝを立ゝて[illegible]ゝゆ[illegible]ゝ斗を駆ゝ敵を追
駆し[illegible]井伊[illegible]ゆ[illegible]も[illegible]
百人斗旗本ゝ立下野守ゝ敗の[illegible]馬を拾ゝ[illegible]

而み筑前殿を追掛〳〵さる薩摩殿を大音上げ
罵りける関東方の角右〳〵武者何百人ありと云
さのみ〳〵なる柄と百可成追掛よと云〳〵み廣云仕てさつ
と引れ土佐多羅見へ追かけんとする下知を忠吉為き
方有る為島津殿の廣云いい関東武者の成まれて未
代迄の張懸と云話を始何と成れば云話を美う
若し武州殿の城と云〳〵関東の方へ来る先
祖代〳〵武功士（蔵カ本ノマヽ）揚き為島津殿廣云なり筑前の逃殿
金石の恥辱を冥東武士の頭を戴く事いと可浦い
岡部右衛門と馬を打寄近出て見て

下知を遂ぎ旗本より先へ掛出〳〵冥東士出来
我も〳〵と追掛る井伊殿浦出政宰相殿百騎追
掛の西岡殿と云遣ふ中死物狂の薩摩殿の逃る
と云例なりと忠吉殿言寄出て殿の口を抑て
引返さる者も下知を遂ぎ馬上の達者馬も逸物なれ
い寄殿〳〵近出て為不及是非出政も馬を打寄り
勢を集めみ味方を制て薩摩殿を
然も出来ぬ云〳〵と運歩み色出い静〳〵と掛り敵の
方み浜地を合為打て後み跡を合へきん形ない出合
頭み乗打歩渡と忠吉殿の先へ寄掛んと鞭を上げ

て家来人とやらんしら忠吉の馬早くして家来かなき
不案の事なれば摂津殿の中より荒子源の名人共百騎斗
打出しいるの時方三十騎ばかり忠吉殿も
此時法馬は玉ゐの毛なるしらい屋風なりし側を和
へ玉ゐの形来て忠吉殿のたの肩みあるしなる
俵藤馬有て敵ゐの新左衛門摂津殿共十人ばか
り法首をとられんと近寄るを忠吉バタと諸鎧を倒
て家付忠吉殿の下み外胸を打て起為ならず
馬の口をくるくると漏を家臣近付摂津殿を
三人迄拂助みせるに忠吉殿の法傳の新和泉守

近付み三人助ける為に法師近習八人迄仕り四人
打れりしらい危き不を法道用しに法運の程を国主さま
を少者岡部六弥太ら働い冷しき武勇成しい之事
摂津殿を十三人迄打れて十騎四方を只三人めて
助拂いる有難なく敵を近付る事なめしとこ
井伊直政を組潮して打しる源九郎玉ゐらい鼻の下を
かきつて無ら塩潮息み家を計奪しに不へみ源と
一ツ来るに大の時へ者りしらめも石源馬より下り立
多の馬へ下れる者を者を和泉守摂津殿多猛人斗
来て岡部六弥太河部和泉守を引包て石働せる源

より退く旋すり下野国産い松浦宗陽参対陣
高の敵なれい是迄参れん井伊豊後い関東一の徒
秘蔵の先手なれい此方人の首れれ申と百人程
漢しい十分危き事なり内府公遠寄時見
下野る参せる豊後を攻兵を率引上らさせると
敗み洗馬を落し落ふを甲州三河の衆組元勢
み立出し敵の出ル知ないい息絶い兎若元を為
参い出る氣を成なと思ひ廣元まて二十
人半旋出るる接動遠み鴻庫勢動百人斗の真
中へ参ひと石黒燈を立戦ふ寄へ豊後の家来脇み市

左力頭として甲州勢み猛人斗連来れい忠吉勢
の思の者百人半旋出て下れ離を攻浮退挙る
へ首を獲み貴き家を立を立ると出い
下野る度危へ連洗旗本ようと旗本元市忠元
立なとゆ下へい関ケ原の大小名雲霞のとく押
寄る見鴻庫中書い参の立み向ひ兵庫以義
弘の馬絡み立ると嗚呼ると見へしい関を引
鴻庫勢の惣大将を度頭義弘い大将ゆ百連
伊勢路へ掛ひ退くを見送ひ鴻庫中書洗脇
鞍笠を立上ると関東方の向へ兵庫以義弘を

対て武士の誉をみせるかゝ為み石見の兵を
左右みえ〳〵真崎み成て大坂の中一刎〳〵と
小東西〳〵敵〳〵命を石塔戦る此時て軍
東方の大小名も員討死ふ知負を此知を れ是さ
る軍東方勝方み成〳〵名将津中書義家を去
留意〳〵命を塵芥と思て生て帰る家み国み
死物狂ひみ功名〳〵る有なり
中書み劣さる勇士といへ共軍東方い大勝
し士卒も軍ケ原迄利運のよい出早迄来賞
を蒙る斗の仕合なれい成を捨〳〵命を捨る
事い不覚と早速損益の利み賢き者と見
〳〵り中書を勧メ多人乃軍い義ふをさ
義〳〵ふよ迄し命い同一事さの〳〵長命
成つまる和なりと人〳〵の接〳〵斗同様しい
成を方事み成と不成とみも成るな
井伊直政下知して曰此その者を去留賞を蒙ら
い時方も為て討〳〵いまさ大将を始て敵
勢の兵馬多〳〵倒や此を〳〵と高声み詞加
此度者表の軍源と云徳川家の法覚厚き直政為
時の者人なり此者を有み御〳〵十方を四〳〵れ巻る

此度薩の方面を指揮中書も淺野源十郎
吉章も八番人の手なれし兵を以て
完全を負ぬ者なし此体を見て中書も
云は向ふ中りるに向ふ而後手と云ふ思ふ
程の軍に志すに勝敗は一退んば者に退き
と有りと云者を人て退といふなり中書も覚
乗と歩笑て敗を薩摩て海山を隔て遠くなり
結句三度川に渡かるといさ諸者と云ふ様に後一文字
に捨ては皆捨ケと云ふ尾形も出て腐る
を見て八番三人の薩摩は第一度に奇和掛合

て先遣しの勝敗も有りの内の常勝の体なし人
数の四を出るに只八番人義弘の伝て退しる斗
少々七百九百の番人義しるそのい者人もなく意
討死ちの日本此の四風なり
大名義弘の大坂を出発退しの乗中を負多く血
しるけに成し常を見て道中常に意に戸を出
し雲ゝ人参もなき体なれい食事を可求敗なく
義弘を初め番人の常馬を乗て資事あり淀
まで海道を常ゝ牛を代金を拵て資て出て
中に大坂に乗る義弘の書中書妻人質として

並しうしを引連れ首遠留守薩摩を引れしい
冷しき鳴津勢初と世高士民恐怖しとと
初て九月十四日中上列より下列迄の内み悪く闌り
京表の合戦事終り所伯出りるい今日打れ所の首
数い石田源治郎蒲家俗を立てるい地村大源村と
い勝負の首しるしまより西の方北首い迄首形り
と所伯出た稀法俗時の時の今日の首い勝負事な
ゆい万事六番所異石先年より首賞格申乙を
改並ぶしい武田流の軍法を津家敬なされ
ありう

国の上列首賞検相源呉
但勝負の首数八千三百一こ
迄首壱万九百六拾
津津津を八千迄て岡山に流立所成列岡山を両後
い勝出て可改なり今日の一戦始りい旗を徐出る事
より勝利と成しうよの俗なり首賞格の高より始
本多中書忠勝津新る伺ゆ一流格移有こ九州庶
を所立流を所立事軍新の規式のて諸大名
大小名の俗ゆい急度名代をさう迄ゆい行る矢
をを付浜地い出ゆを助て軍を心み持て聽とト

付並諸將者申對面ならびに仮なり仮に屋敷
同見の内より一番福島左衛門大夫正則屋敷なる本多中書
靭負殿い方味方の諸將者武勇同を勇しる仮なり
殿ハ銃中福島左衛門の忠戦ハ双の御働なりと申
物者有しかい内府公申成様より雑ら正則の武勇上
左越者ハ人ハ〻と云物語りの所正則ハ伝聞ふ
所れ所ハい中書諸軍の指揮戦場の振合を先鋒
仮ハ殿ハと参迫されしかい内府公ハ笑成忠勝ら事
内ハ石田と所ハ云ハ参ハ西殿ハ〻と所ハ右ハ此高ハ
敵軍悪く退敗の事ハ中を百ハい味方者の内

み申ハ誠ハ誰ら成の上ハと同と同を見合者ハ如
ハ然く中の諸左メルと云事此高の事ハ西ハ〻ハん
相所要なりと申忠有ハ清中の諸を志ると云ハ
殿ハい勝軍ハ息家左衛門ハ誠メの仮とハ
本多内記忠勝後号出雲守力量ハ仕ハ勝ハ人を討ハ
右力志ハ仕ハ覇ハ石内を見掛ハ申ハ一番ハ
内府公仕ハ忠勝為事ハ武勇ハ仕ハい先鋒を
石鉦徳川の奬嘆と云褒美の時頭を地ハ付ハ
ハ次ハ織田源右衛門道有樂ハ云ハ自ハの言名古
川ハ云ハ殿ハ殿ハ有樂時ハ老後不

相模成働若栄〻相模へ移田住合と申候
仰付られ候の儀相聞る蒲生備中の首を持来れと
有り申候に付て特と申候
敵方へ之を出と申越候に付早石田方へ相渡し由
被遣候
減和の高本領を家康
方へ之を出と申越候に付早石田方へ相渡し由
被遣候
み而外ケ浜の士も沿山する不出来物と適武功を
上しる勇士同之を有る能く吊られ之を
見加へ叶しる士なりと有家康家臣
の幹方に云若栄を一日いの弱い者と
有り有る者中より習日(の)者探り知首を獲出る

討人不知在命を以て紙百出を
有樂橋男河内を取出い仰付先達の戸田武蔵
を突伏時武蔵を甲を取り八幡殿へ突伏
る事を為見いへと有り
早速へ申見られ
早〻申指へ〻一番る之を内府仏
申之を出造り村正殿へ村正でなくいめ新物先ふ
てもと仰有り為を為見殿へ果して村正なり
諸大名奇代の申聞家なりと感河内迄の仰
再び特仕と上る紙い出み特を為給へ
能く名人なれい特人の成み崇ると云て

業代々上手もなき物と成り行く有り難き
世話未だ和らぎ成り難く修理亮長盛と云る監物
秀親と云る伝授を秀一の代を持て仕り来る物
代世の業者にて有るの所事み云所を成共
思ふに東照宮の御一云萬事みな遠事なる松平
下野守殿二ヶ所を賜ふ井伊兵部少輔も脇を
頭み成掛成共同列之下野守殿も賜いと導
の所み忠吉殿伝落みあり所と豊政殿み
成品を持長成と有席机より持立有り迫寄せ
幾人出政殿所へと持導とものが警固石に持新色高

早速御脇より持業を成為所出政み
下野守殿へ成を岳北お浦寺へ成向今日の合戦出政
成戦場へ出の事一早く所る下野守殿の持武勇み同
事みいと舎人なく成所と成る内府公様成る持顔
見みあり出政の猶舎人石猶と持猶物の如へ大小名
の猶系一同しう一々持品を成掛物武蔵助を成百て
筑前中納言を成百姓舎秀秋早速寺へ成為所
成の家人稲葉作渡る西岡石見る物地豊馬之が迫
習七人成連ある又猶伝しう一服坂中務安治物木の内る
利綱小川右衛る猶忠赤座久兵衛出保秀秋人成

成しと出仕せ此度の内府公あれも事成机をりさせ
給ひ給ふ座をん事座の下へ手を出るとこ中納言秀吉
いまの上ハ晩く内府公事ハ家川家和睦方ハ属
度との志方度石ものとの事なり秀吉ハ家ハ伏ハ
ハ曰敵軍退散ハ家ハ三成ハ長等乃
逆敵生死ハ知ようハ押掛ハ三成の居城ハ別仕和
山をハ責落ハ家ハ可然相心と事ハ三の下ハ
筑前中納言秀吉ハ上ハ仕和ハ城攻ハ切ハ来
ハ所ハ分可然下ハ者ハの渡しハ所ハ上ハ只所候
事ハ同代を所ハ分筑前ハ家ハ頼ハ

詫沼成しハ内府公ハ聞届有ハ実新ハ
たも有ハ家川の者ハ神妙ハ有ハ所ハ
しハ秀吉ハ秀吉の所ハ事ハ有ハ度ハ
見悪ハ相源事ハ内ハ家ハ無ハ秀吉相源ハ山岡
道阿弥所ハ上ハ也ハ来の明ハ此度の事ハ
亂舞ハ上ハ成ハ事ハ成ハ延引ハ有ハ所ハ上
内府公事ハ家ハ成ハ勝利ハ有ハ戦場亂舞ハ
上ハ軍川の為ハ成ハ我何ハ意ハ猶ハ保一の弱ハ
ハ家ハ家康ハ中納ハ勝ハ家ハ思ハ有ハ
事ハ意の下ハ成ハ事ハ出ハ此ハ成事ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

詔ありて内府公
清忠を全く勝の仰み遊ばる幕末下向の大小名書
る大坂に有りし敵中の伯爵
を思ふ事骨髄に徹し
坂に至り書を引渡し
宮に移り清忠を浪花に遣
拾大小名に賜る諸事
滅せ
金吾退出の後清忠を呼掛
金吾黄門殿を守り奉仕
木
朽ちたる

くい中願安抜い仰渡し
不可抗時をとの清忠奉
本多中書相動る諸方へ
井伊出政部上の今日下れる
中に宮に逆物の書のみ
りに当さしいとよまし
なりと君臣金不感仰の式代
名に内府公諸大
内いを去れてらいと是の
仰一ぬ仰を所に出

賞
の
侍
を
し
と
逆物の
同
に
内府公
合戦の味方大名の
者を
人も
古利を
事を偏

天仁家康ノ仁中私欲ヲ石畳ヲ下ニ立テ万民安穏
の世ヲ仕至大至聖境ヲ叫いい必時ヲ有リ天ノ向ク
ヲ知ル知合ヲ知ル礼ヲ是ヲ事見大小名高ヲ宮ヲ
天地感應の名ヲと雷ヲ感と云ク
早速ヲ使ヲ人事忠仁極ヲ利の吉事ヲ行ヲ
必ず真田安房ヲ知ル攻掛ル成ル遠ル孔成
必度羅ケ原の法ヲ箸相遠ル

日本一統志巻第九十四終

海巣村 蔵書之記 幸田氏

特 3 1

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用